2021年2月7日・佐土原キリスト教会・礼拝説教
聖書箇所：ヨハネ福音書15章1～10節
説教題：信仰の成長をめざそう

神学校である先生が「私達が栄光の体を頂く時、私達は、私達が理想として描ける30歳位の体に変えられるのではないか」と言われました。具体的な話だったので印象深く覚えています。その後、1つの話を聞きました。1人の姉妹が、お母さんが亡くなる直前に幻を見ました。その幻の中で、お母さんは天国に続く階段を上って行きました。ところが、階段を上っていくお母さんの姿が、ある所で若者の姿に変えられて、そしてその後は、駆け上がるようにして階段を上って行ったそうです。姉妹が幻から醒めて、「お母さんは天国に行くんだ」と平安が与えられた直後に、お母さんは息を引き取られたそうです。私達の人生は、地上の生涯が終わった後にこそ、素晴らしいことが待っているのだと思います。だからこそ、天国を十分に楽しめるように、今のうちに、少しでも魂を天国向きに変えたいと願います。

イエス様の説教が続きます。今朝の箇所は「ぶどうの木の譬え」として有名な個所です。イエスはここで何を教えておられるか。一言で言うと「信仰の成長」ということです。私達はイエス様を信じる決心をして、信者として歩み始めます。喜びがあり、感動があり、恵みを経験して行きます。しかし一方で、相変わらず自我に振り回され、醜い思いを持って生きている自分もいるのです。それを見て、悩んだり、がっかりしたりするのではないでしょうか。神様が私達を召されたのは、素晴らしい信仰生活を経験させるためです。しかし現実にギャップがある。その意味で「信仰の成長」は、信仰生活の大切なテーマだと思います。3つのことを申し上げます。

1：「信仰の成長」の目的

イエス様は1節で「わたしはまことのぶどうの木で(す)」と言われます。私達には唐突に思える「ぶどうの木の譬え」ですが、ユダヤ人である弟子達には、そうではありませんでした。というのは、「旧約聖書」はイスラエルの民を「神のぶどうの木」として描いているからです。例えば「ホセア書」は「イスラエルは、多くの実を結ぶよく茂ったぶどうの木であった」(ホセア10:1)と言いました。ぶどうの木は、イスラエルの民の象徴でした。しかし「旧約聖書」は「イスラエルは神のぶどうの木だったのに、よい実をつけることができなかった」と語るのです。つまりイエス様の言葉の背景には、「イスラエルは神のぶどうの木だったのに、神の御心に適うよい木に成長することができず、むしろ荒れ果てたぶどうの木になってしまった」という事実があったのです。その結果、彼らは、本来期待されていたはずの実り豊かな歩みをすることが出来なかったのです。

実りとは何でしょうか。例えば私達に期待されている実りは何でしょうか。神が望んでおられることは、1人でも多くの人が救われることですから、その意味では、「福音を伝えること」もあるかもしれません。しかし、ここで言われていることは、それよりもっと広い意味で「イエス様を信じる者としての生き方の実、人生の本当の実」ということではないかと思います。では、「イエス様を信じる者の生き方の実」とは何でしょうか。「ガラテヤ書」には「霊の結ぶ実は、愛に生き、平和に生き、寛容に生き、親切に生き、善意に生き、誠実に生き、柔和に生き、節制に生きることだ」(ガラテヤ 5:22・意訳)とあります。ある人は、それをまとめて「『信仰の成長』のしるしは愛と謙遜だ」と言いました。そのように生きることが出来れば、私達の人生はもっと豊かになるのだろ

うと思います。しかし、そこにとどまらない。さらに大きな目的があります。イスラエルは、自分達が実りをつけることが出来ないことを通して、神の栄光を表すことに失敗したのです。8節に飛びますが、「あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです」(8)とあります。佐藤彰先生に頂いた半谷昌という方の生涯を描いた証の本の中に、次のような文章がありました。「クリスチャンではない方の口からも、『本当の神様がいるとすれば、あの方が信じている神様かも知れない』と聞こえてきた…」。1 人の姉妹を通して、神の栄光が現れたのです。コロナ禍の今、「人間はもっと謙虚になることが求められているのではないか」という声を聞きます。しかしそれも含めて、神が生きておられることを知ること、神の前に遜ることを知ること、そのことが、1人の人生にとっても、人類の未来にとっても、本当に大切なことだと思います。神が生きておられることは、どうやって示されるのか。それは神ご自身が為さることでしょうが、しかし神様は、私達のような者の人生を用いてご自身を現して下さる方です。私達が人生の本当の実りをつけて、そのことを通して、どんなに細やかでも神様の存在を周りの方々に示すことが出来れば、私達の人生には、何と大きな意味、永遠の意味が生まれることでしょうか。成長し、人生の実りを実らせる目的は、神の栄光を表すことです。それはまた、私達が自らの人生を最高に生きることでもあるのです。

2：「信仰の成長」をもたらすもの

具体的に何が「信仰の成長」をもたらすのでしょうか。2つあると思います。1つは、神様がして下さること、もう1つは、私達がすることです。

1）神がして下さること

イエス様は2節で「わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます」(2)と言っておられます。これは「実を結ばない信者は取り除く」と言っておられるのではなく、イエス様を信じる者皆が、もっと良く人生の実りを実らせることが出来るように、神様が1人ひとりに刈り込みをして下さる、ということです。ぶどうはパレスチナ全体でよく栽培されましたが、よく刈り込みをしないと、葉ばかり茂らせて実を結ばないようになってしまうそうです。栽培者は、そうならないように、枝をよく見分けて、実を実らさない枝は徹底的に刈り込むそうです。そうすると実を実らす枝は、ますます豊かな実を実らせるようになるそうです。イエス様は、神様が信仰者1人ひとりをそのように扱って下さると言われるのです。

実際、私達は、信じた後も、色々なところを通らされて信仰を育てられて行くのではないでしょうか。メノナイトの神学校の校長先生の著書にハワードという兄弟のことが書いてありました。彼は小さい頃から神童と言われて育ち、順調に大学に入り、卒業と同時に大学に残って研究者としての生活をしていました。自分の研究、それが彼にとって人生で最も意味のあることでした。ところが、研究に没頭しているうちに大きな病気をしてしまいます。それは、彼にとっては大きな挫折でした。しかし、その状況の中で初めて彼は、自分の人生にとって一番重要なことは何なのか、ということを考えるのです。それまでの自分の価値であった業績が取り去られた時、彼を支えたのは「その状態でも自分には寄り掛かって行くものがあった」という発見でした。つまり、神に頼れるということがいかに大きなことであるか、を理解したのです。同時に自分は本当の意味で神様を求

めて歩いて来なかった、ということを感じるのです。やがて彼は、信仰者として愛を磨くことが人生の目標になるのです。彼は言っています。「神は、時に私達の枝を切り取られる。そのことを通して私達が人生の実を結ぶことができるようにして下さるということを今実感している。病気がなければ、私は人生の中でイエス様に会う備えをすることをしなかっただろう、大変なことになるところだった」。そう言って神様の刈り込みに感謝しているのです。

私は、神様がわざと彼を病気にしたとは思いません。神が私達に大事なことを教えるためにわざと苦しみを与えるとは思いません。しかし神様は、私達に大事なことを気づかせ、もっと豊かな歩みをさせるために、私達にやって来る痛みを用いられるということがあるのではないかと思います。それは、否定的な、消極的なことではないように思います。むしろ、その理解が、私達に色々な問題がやって来た時、「この苦しみにも必ず神の計画があり、神様は私をさらに祝福に向けて成長させようとしておられる、神様はこの苦しみを人生の祝福に変えて下さるのだ」と思うことが出来るのです。そして実際そうに違いないのです。

2）私達がすること

ここが今朝、一番申し上げたいことです。イエス様は、この個所で繰り返し「わたしにとどまりなさい」と言っておられます。4 節「わたしにとどまりなさい…あなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません」(4)。5 節「人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます」(5)。6 節「だれでも、もしわたしにとどまっていなければ…」(6)…。「わたしにとどまれば実を結ぶ」「わたしにとどまっていなければ実を結ぶことはできない」と繰り返し言われるのです。では「イエス様にとどまる」とは、どうすることでしょうか。それは 7 節です。「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら…」(7)。つまりイエス様にとどまるとは、「イエス様の言葉にとどまる」ということです。私は改めて言葉の重大さを思うのです。私が居たバンクーバーは、人口の半分の人は家庭で英語以外の言葉を話しているそうです。色々な国から集まっているから、母国語もバラバラです。私達の家庭では、もちろん日本語でした。日本語を話すということは、日本語を使って考えるということです。つまり日本語文化の価値観で生きるのです。それぞれの言葉を話す人達も、その言葉の文化で生きているのです。そのバラバラの文化的背景の人々をカナダ人として生かしているのは英語です。言葉です。(ちょっと言い過ぎかも知れませんが)。ある日系人の方が言われました。「家の娘たちはバナナです」。外側は日本人だけれど、内側はカナダ人だという意味でした。学校で、英語で学び、英語で考えて行く中で、カナダ人としての価値観、生き方の様式が身について行くのではないかと思うのです。もちろん、言葉だけではないと思います。その意味で譬えはまずいですが、申し上げたいことはこうです。イエス様の言葉を、私達が本当に心に蓄え、イエス様の言葉の価値観に影響されて物事を考えるようになるなら、やがて自然と、少しずつでも、イエス様の言葉の価値観で生きるようになるのではないでしょうか。私達を信仰者として成長させて行くのは、言葉ではないでしょうか。「デイリー・ブレッド」にこんな記事がありました。「チャールズ・シメオンは英国ケンブリッジで 50 年牧師をしましたが、新米の頃…きつくて自己主張が強い(人でした)…シメオンは、時を経て、優しい人になりました。その理由の一つは、彼が毎日、聖書を真剣に読んで祈り、それを実行したことです。彼と数か月、寝食をともにした人は、その努力を

目の当たりにし『あれが、彼のあわれみ深さと強い霊性の秘訣だ』と語りました…」。御言葉に変えられたのです。その意味でも、イエス様の言葉、聖書の言葉に触れ、御言葉を蓄えることは、私達の信仰生活にとって大切なことなのです。カナダにいる時、お交わり頂いた韓国人の先生が「弟子訓練、弟子訓練」ということを盛んに言われたので、「弟子訓練とは何ですか」と聞いたことがあります。その先生は言われました。「御言葉を学ぶことです。御言葉が入ると、その人は変えられます」。「百万人の福音(1 月号)」に本田路津子さんの証がありました。彼女は単語帳に御言葉を書いて、それをバッグの中に入れて、持ち歩いて、御言葉を覚えていると、それが信仰生活を豊かにしていると、言っておられました。

私達は、御言葉にとどまることに、もっと貪欲になって良いのではないでしょうか。悩みの時に、悲しみの時に、決断を迫られる時に、もちろん喜びの時にも、いや、何気ない人との交わりにおいても、御言葉に導かれて行く、そんな信仰生活を目指したいものだと思います。その意味で毎日少しでも聖書に触れることが大切です。聖書を抜きにして信仰の成長はないと、イエスが言われるのです。そして、そのように御言葉に導かれ、少しでもイエス様の価値観、聖書の価値観をもって祈るなら、それは「かなえられます」(7)とイエス様が約束して下さっています。

聖書を読みましょう。御言葉を蓄えましょう。イエス様の言葉の中に人生の根をおろしましょう。私達のまだまだ知らない豊かな信仰生活が待っていると思います。

3：「信仰の成長」の祝福

信仰の成長が何をもたらすか、今日の箇所の次の 11 節にこうあります。「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです」(11)。信仰の成長がもたらすものは、喜びだと約束して下さいました。それは、「ハハハッ」という喜びではないかも知れません。しかし、「聖歌 476 番」は「このやすき、この喜び、たれもそこない得じ」と歌います。何がやって来ても、損なわれない喜びなのです。そしてそれは、地上における喜びはもちろんですが、それ以上に、やがて天に帰った時の計り知れない喜びに繋がっているのではないでしょうか。そこに向かって歩みを進めましょう。